



『感染症の生態学』

日本生態学会 編

2016年3月 共立出版 発行

356頁

定価（本体 3,600円＋税）

近本翔太・浅川満彦（酪農学園大学）

「シリーズ現代の生態学」は、2011年以来、日本生態学会により「多様化する生態学の第一線で活躍している研究者を執筆陣に迎えた教科書シリーズとして」（<http://www.kyoritsu-pub.co.jp/series/111/>）発行されてきた。野生動物医学の各研究領域にも密接に関わるので、是非とも、全巻揃えたいが、その全11巻中の最後に刊行されたのが本書である。然り。感染症という現象もしっかりと生態学の対象になるのだ。2015年の日本野生動物医学会江別大会の米国の専門家を招聘したシンポジウムでも Disease Ecology が主題となったので、皆さんの思考は既にフォーマット済みではあろう。しかし、実は日本でもちゃんと疾病生態学が根付いていたことを、特に、若い世代は認識をして欲しい（欧米の後塵を被ってばかりではない！）。そのようなことを鑑み、まず、本書をゼミ生（近本）に読みこなしてもらい、概要紹介を前段でもらった。（文責 浅川）

近年、インフルエンザやデング熱などの感染症が猛威を振るい、人々の生活を脅かしている。感染症は決してヒトに限られた疾病ではなく、動物や植物まで様々な生物に存在する。感染症は原因や発症、伝播に複雑なメカニズムを持っており、対策にはそのメカニズムを理解することが重要となってくる。感染症への理解を深めることができる1冊として本書を紹介する。本書は4部、26章構成である。まず、第1部（基礎知識）では感染症とは何なのか記されている。感染症の因子としての細菌やウイルス、寄生虫が宿主に侵入するまで、およびそこから感染症発症

までのメカニズムが簡潔に書かれている。さらに、感染症が宿主（host）、病因（agent）、環境（environment）の3要素から成り、数式を用い、どのように感染症が伝播・拡散していくかが詳述されているが初学者にも比較的的理解しやすい記述であるので、安心して読んで欲しい。第2部（感染症の生態学的機能と進化）では、病原生物は宿主個体だけでなく、宿主と他の生物との種間関係、つまり生態系をも改変するというテーマのもと、様々な事例が紹介されている。さらに、病原生物の多様性と生態系の健全性が関連する点も、外来種問題と織り交ぜ論考している。特に、種の絶滅要因となる感染症も紹介されているので、野生動物医学を志すものは必読であろう。第3部（感染症事例）は植物から魚介類、鳥類、哺乳類における感染症について、それらの原因、感染経路、感染症に起因する諸問題等が解説されている。なお、ヒトの代表的な感染症としては真菌症、インフルエンザ、AIDS、マラリア等が扱われていた。第4部（対策と管理）は、隔離やワクチン、環境管理といった対策の意義と具体的例が記されている。さらに、現在ヒトの感染症の重要な拡大要因となっている院内感染についても、そのリスクや薬剤耐性菌の発生メカニズム、対策まで細かく書かれている。

本書だけで感染症のすべてを理解・応用するには物足り無いが、獣医学課程で個別に学ぶ感染症関連の各科目を統一的に俯瞰する上では有益な書であると感じた。（文責 近本）

科学分野が細分化していく一般的な傾向は、感染症の根本的な対策において阻害因子となる。そのような反省から One Health コンセプトが提唱されたのであろうが。本書は拡散する感染症研究を生態学のベースで統合しようという壮大な試みを垣間見た。本来ならば、本学会で行うべきことであったと感じたので、ちょっと悔しい。しかし、本書には本学会で活躍する研究者も分担執筆をしているので、一矢を報いてはいる。なお、拙稿宣伝で申し訳ないが、本書「防除対策」は浅川が執筆した（酪農学園大学野生動物医学センターの概観と入院室での作業中の様子を活写した図含む）。ご覧頂ければ幸いです。（文責 浅川）